# 親子関係を測定する質問紙を用いた研究の文献目録[i]

## A Bibliography of Studies on Questionnaires of Child-Parent Relationship

大　芦　　治

Osamu　OASHI

### はじめに

子どもの性格や社会性の発達に親子関係はどのような影響をあたえるのだろうか。心理学はこのような問いを度々繰り返してきた。特に，近年，少年による凶悪犯罪の実態がマスコミを通して盛んに取り上げられる中で，この問いかけはますます熱気を帯びている。また，こうした社会状況に触発されてさまざまな性格特性や社会性の発達に影響する親子関係のあり方に関して実証的な調査を行い明らかにしようとする研究は，その手法自体は決して新しいものではないのだが，相変わらず下火になる気配はない。

こうした研究では，親子関係を測定する質問紙がよく用いられている。それらの質問紙は多種多様で，中には市販されているものもあるが，実際には内容的にはそれほど違わないことが多い。すなわち，質問の内容は親の子どもに対する養育態度に関するもので，評定方法も，親自身が直接評定するか，子どもの側が認知した親の養育態度を評定するかのいずれかというものがふつうである。

しかし，多くの親子関係の質問紙を用いた研究を見ると明らかになるのだが，これらの研究では用いている親子関係の質問紙がどのような先行研究において作成され，使用されるようになったのかということについて具体的な記述がほとんどない。同様に市販されている親子関係の質問紙の利用の手引きにおいても具体的な来歴等は述べられていないことが多い。したがって，親子関係の質問紙を用いた研究を行う者は，多くの類似した質問紙の中からその都度，適宜，質問項目を選び使用するだけで，親子関係の質問紙の背後にある概念，先行研究などにはほとんど考慮を払っていないのが実情であろう。

本稿は，このような現状を鑑み親子関係の測定法や質問紙に関して行われた主要な研究論文を目録の形で列挙し，それに簡単な解説を付して，今後の研究の参考に利用されることを目指したものである。

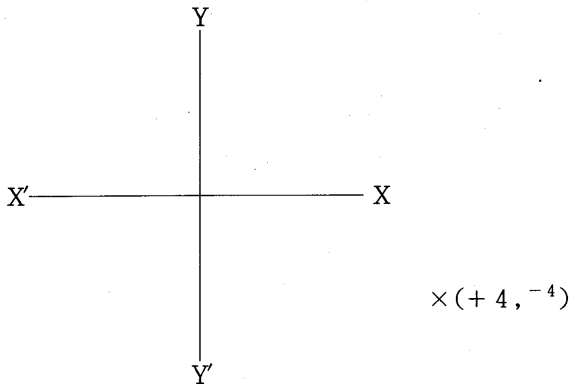
なお，はじめに述べておくが，以下の文献リストに列挙する文献はすべて国内の大学図書館などで入手可能なものである。この分野の研究が盛んに行われるようになってからすでに40年以上たっていることもあり，文献によっては引用回数は多いものの現在では入手が極端に難しいものがあるが，それらの名称だけを記すことはしていない。

### 古典的研究

Holden & Edwards (1989)[47] によれば，親の子どもに対する養育態度の測定を試みた研究のもっとも古いものは1899年にまでさかのぼれるという。今日，我々が普段目にする親子関係の質問紙の原型をなす概念の源流はSymonds(1937)[1]の研究に求められる。この中でSymondsは，親子関係には，過保護(over-protection)―拒否(rejection)の両極からなるX軸と，支配(dominant)―服従(submissive)からなるY軸の２つがあり，両者は直行しておりこれらの２つの軸から作られる空間のどこに位置するかで親子関係の分類が可能なことを示唆している（図１参照)。ただし，Symondsはこの論文のなかでは，具体的な測定方法は示していない。Symondsの著書，論文は他にもいくつか確認できるが，現在では入手は難しい。

---

i　本稿は、日本文化科学社より近日刊行が予定されている「親子の相互理解調査（東　洋・柏木惠子・繁多　進　著）」を作成するにあたり，その準備段階で収集した文献をもとにまとめたものである。資料の整理に際して大野祥子氏（山村女子短期大学），唐澤真弓氏（東京女子大学）の協力を得た。記して感謝したい。




X coördinate = over-protection − rejection; Y coördinate = dominant − submissive.
Names could be given to various extremes of parental behavior as follows: neglect (−4, −4); cruelty (−4, +4); over-protection (+4, +4); indulgence (+4, −4).

**図1　Symondsによる親子関係の2次元（Symonds, 1937）**

Symondsの研究に続いて，実際に親子関係の測定を試みた古典的な研究が登場している。Champney (1941a[2], 1941b[3]) は30項目からなる測定尺度を開発し，① freedom-control, ② stimulative-inactive, ③ maladjusted-harmonious, ④ approving-deprecating, ⑤ emotional-rational, ⑥ socialized-individualizedの6つのサブスケールを設けているが，これは因子分析などの多変量解析によって抽出されたものではないようだ。Roff(1949)[4] はこのChampneyの質問紙に因子分析を試みている。他にこれと関連した研究としてBaldwin, Kalhorn, & Breese(1945)[5], Becker, Peterson, Hellmer, Shoemaker, & Quay(1959)[6] がある。また，Shoben(1949)[7], Swanson(1950)[8], Shapiro(1952)[9], Mark(1953)[10] なども親子関係の測定を試みた初期の研究としてときどき引用される。

**＊文献リスト1（古典的研究）**

(1) Symonds, P.M. 1937 Some basic concepts in parent-child relationships. *American Journal of Psychology*, **50**, 195-206.
(2) Champney, H. 1941a The measurement of parent behavior. *Child Development*, **12**, 131-166.
(3) Champney, H. 1941b The variables of parent behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **36**, 525-542.
(4) Roff, M. 1949 A factorial study of the fels parent behavior scales. *Child Development*, **20**, 29-45.
(5) Baldwin, A.L. & Kalhorn, J., Breese, F.H. 1945 Pattern of parent behavior. *Psychological Monograph*, **58**(3).
(6) Becker, W.C., Peterson, D.R., Hellmer, L.A., Shoemaker, D.J., & Quay, H.C. 1959 Factors in parental behavior and personality as related to problem behavior in children. *Journal of Consulting Psychology*, **23**, 107-118.
(7) Shoben, E.J.Jr. 1949 The assessment of parental attitudes in relation to child adjustment. *Genetic Psychology Monographs*, **39**, 101-148.
(8) Swanson, G.E. 1950 The development of an instrument for rating child-parent relationships. *Social Forces*, **29**, 84-90.
(9) Shapiro, M.B. 1952 Some correlations of opinions on the upbringing of children. *British Journal of Psychology*, **43**, 141-149.
(10) Mark, J.C. 1953 The attitudes of the mothers of male schizophrenics toward child behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **48**, 185-189.

### 2次元モデルとSchaeferらの研究

古典的研究として紹介した諸研究は研究者が必要に応じて次元を列挙して測定尺度を構成したものが多く，必ずしも，Symonds(1937)[1]によって提起された2次元を踏まえてはいなかった。Symondsの2次元を意識した上で親子関係の次元を因子分析によって因子を抽出するという方法を広めたのはE.S. Schaeferによるところが大きい。Schaefer(1965b)[26]によれば2次元モデル（two-dimensional model）はSchaefer(1959)[11]，Slater(1962)[12]などによって独立して発展してきたものだというが，実際はこれらの研究がSymondsの次元を実証して行く中で2次元モデルが一般化していったというべきなのかもしれない。このうちSchaefer(1959)は既存のデータを再分析するなかでLove-HostilityとAutonomy-Controlとの2次元を見いだしているが，前者がSymondsの過保護—拒否，後者が支配—服従に相当する。Slater(1962)も56項目からなる測定尺度（Parental Role Pattern Questionnaire）を作成しSymondsのものに相当する2次元を見出している。

Schaeferは，親子関係を測定するための質問紙を2つ作っている。ひとつは親が評定するもので Parent Attitude Research Instrument（PARI)というもので，もう一方は，子どもが認知した親の養育態度，親子関係を評定させるものでChildren's Reports of Parental Behavior Inventory（CRPBI）といわれる。

### SchaeferのPARIに関する研究

以下，まず，PARIからみてゆく。PARIに関する研究はかなりの数にのぼりそのすべての文献を入手し明らかにすることは難しい。知りうる限りの情報によれば，PARIは先に紹介したShoben(1949)[7]やMark(1953)[10]などで用いられた項目を精選し，改変を加える中で成立したようである。PARIはいくつかの版があるようだが，入手できる文献からは第3版（form Ⅲ）と第4版（form Ⅳ）とよばれるものが確認できる。

Schaefer, & Bell(1957)[13]は，PARIの第3版（form Ⅲ）を用い因子分析を実施し5因子が得られている。この翌年出されたものが第4版（form Ⅳ）で，これが最終版としてその後も使われることとなったらしい。PARIの第4版はそれぞれ5項目づつの23の下位尺度からなり全115項目から構成されている。この23の下位尺度の得点に因子分析も実施されたようだが詳細は明らかではない。ただし，Zuckerman, Ribback, Monashkin, & Norton(1958)[14]によれば，① controlling-authoritarian，② hostility-rejection，③ democratic-equalitarianの3つの因子が得られているという。この3因子のうちはじめの因子はSymondsの「支配—服従」に相当すると思われるが，後の2因子は「過保護—拒否」に関する内容が2つに分かれたかのように見える。また，Zuckerman, Ribback, Monashkin, & Norton(1958)[14]は222人の母親を対象にPARIを実施しよく似た3因子を，Nichols(1962)[15]は父親を対象とし5因子を抽出するなどの因子分析的研究も行われた。PARI（第4版）の作成過程はSchaefer, & Bell(1958)[16]に詳述されており，質問項目もすべて掲載されている。なお，PARIの短縮版といわれるものもあり，論文中に項目も掲載されている（Gross &, Kawash, 1968[17]）。また，Schaeferらは質問紙だけでなくインタビュー法による親子関係の測定法も試みていた（Schaefer, Bell, & Bayley, 1959[18]）。

このPARIで測定された親子関係と子どもの心理的特性との関係を検討した研究としては，精神分裂病の母親について検討したZuckerman, Oltean, & Monashkin(1958)[19]の研究，非行少年の母親に関するMadoff(1959)[20]の研究，アンダー・アチーバーに関するShaw, & Dutton(1962)[21]の研究，権威主義的性格と養育態度の研究(Filsinger, 1981[22])，中学生の問題行動と養育態度(Zunich, 1962[23])などがある。また，PARIの研究についてのレビュー論文としてBecker, & Krug(1965)[24]がある。

PARIに関する研究はこの時期を境にアメリカでは下火になってゆき現在ではあまり見られない。一方，わが国ではこのPARIが翻訳される過程を通して開発された質問紙が現在までつづいて使用されることになるが，それらの文献ついては後に述べる。

### SchaeferのCRPBIに関する研究

次ぎに，子どもが認知した親の養育態度，親子関係を測定する質問紙Children's Reports of Parental Behavior Inventory（CRPBI）についてみてゆく。

CRPBIはPARIよりやや遅れて開発が始まった。Schaefer(1965a)[25]は各10項目からなる26の下位尺度の項目が

収集（項目のサンプルは論文中にみられる），つづいてSchaefer(1965b)[26]は因子分析が試み① love-hostility (acceptance-rejection)，② firm control-lax control，③ lax discipline-extreme autonomy (psychological control-psychological autonomy) の3因子を得た。また，Schludermann, & Schludermann(1970)[27]の試みた因子分析でも似た結果が得られている。また，Rowe(1981)[28]は，CRPBIの短縮版を作成している。

CRPBIは，その後もSchaeferの後継者によって継続的にデータが収集されたようで18の下位尺度，108項目のものが一般的に使用されていた（Schwartz, Barton-Henry, & Pruzinsky, 1985[29]）。また，応用的な研究の中には比較的新しいものもみられる（De Luccie & Davis, 1991[30]）。

なお，CRPBIに関連した研究の展望としてGoldin(1969)[31]のものがある。

**＊文献リスト2（Schaeferらの研究およびそれに関連するもの）**


(11) Schaefer, E.S. 1959 A circumplex model for maternal behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **59**, 226-235.

(12) Slater, P.E. 1962 Parental behavior and the personality of the child. *Journal of Genetic Psychology*, **101**, 53-68.

(13) Schaefer, E.S., & Bell, R.Q. 1957 Patterns of attitudes toward child rearing and the family. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **54**, 391-395.

(14) Zuckerman, M., Ribback, B.B., Monashkin, I., & Norton, J.,A.,Jr. 1958 Normative data and factor analysis on the parental attitude research instrument. *Journal of Consulting Psychology*, **22**, 165-171.

(15) Nichols, R.C. 1962 A factor analysis of parental attitudes of fathers. *Child Development*, **33**, 791-802.

(16) Schaefer, E.S., & Bell, R.Q. 1958 Development of a parental attitude research instrument. *Child Development*, **29**, 339-361.

(17) Gross, H., & Kawash, G.H. 1968 A short form of PARI to assess authoritarian attitudes toward child rearing. *Psychological Reports*, **23**, 91-98.

(18) Schaefer, E.S., Bell, R.Q., & Bayley, N. 1959 Development of a maternal behavior research instrument. *Journal of Genetic Psychology*, **95**, 83-104.

(19) Zuckerman, M., Oltean, M., & Monashkin, I., 1958 The parental attitudes of mothers of schizophrenics. *Journal of Consulting Psychology*, **22**, 307-310.

(20) Madoff, J., M., 1959 The attitudes of mothers of juvenile delinquents toward child rearing. *Journal of Consulting Psychology*, **23**, 518-520.

(21) Shaw, M., C., & Dutton, B., E. 1962 The use of the parent attitude research inventory with the parents of bright academic underachievers. *Journal of Educational Psychology*, **53**, 203-208.

(22) Filsinger, E.E. 1981 Parental attitudes toward child rearing and the psychological differentiation of adolescents. *Journal of Genetic Psychology*, **139**, 277-284.

(23) Zunich, M. 1962 The relation between junior high-school students' problems and parental attitudes toward child rearing and family life. *Journal of Educational Research*, **56**, 134-138.

(24) Becker, W.C., & Krug, R.S. 1965 The parent attitude research instrument-A research review. *Child Development*, **36**, 329-365.

(25) Schaefer, E.S. 1965a Children's reports of parental behavior:An inventory. *Child Development*, **36**, 413-424.

(26) Schaefer, E.S. 1965b A configuration analysis of children's report of parent behavior. *Journal of Consulting Psychology*, **29**, 552-557.

(27) Schludermann, E., & Schludermann, S. 1970 Replicability of factors in children's report of parent behavior(CRPBI). *Journal of Psychology*, **76**, 239-249.

(28) Rowe, D.C. 1981 Enviromental and genetic influences on dimensions of perceived parenting: A twin study. *Developmental Psychology*, **17**, 203-208.

(29) Schwartz, J.C., Barton-Henry, M.L., & Pruzinsky, T. 1985 Assessing child-rearing behavior: A comparison of ratings made by mother, father, child, and sibling on the CRPBI. *Child Development*, **56**, 462-479.

(30) De Luccie, M.F., & Davis, A.J. 1991 Father-child relationships from the preschool years through mid-adolescence. *Journal of Genetic Psychology*, **152**, 225-238.

(31) Goldin, P.C. 1969 A review of children's report of parent behavior. *Psychological Bulletin*, **71**, 222-236.

**BlockらのCRPRに関する研究**

Child Rearing Practices Report (CRPR) は，カリフォルニア大学バークレー校のJ.H.Blockが1965年に作成した質問紙で，父母に評定させる形式をとる。当初は各13項目で7つの下位尺度からなる91項目で構成されていたが後には38項目版も用いられた。この質問紙はJ.H.Block 独自の発達理論を実証するためにつくられたものでSymondsやSchaeferのいわゆる2次元モデルに基づくものではない。CRPRの全項目は公開されていないがサンプルはMcNally, Eisenberg, & Harris(1991)[32] の論文中に掲載されている。この質問紙はBlockを中心とした大規模な縦断的研究で用いられた。Block, J.H. Block, J. & Morrison(1981)[33], Roberts, Block, J.H., Block, J.(1984)[34], Vaughn, Block, J.H., Block, J.(1988)[35], McNally, Eisenberg, & Harris(1991)[32] などの研究はみなこの縦断的研究の一部である。

ほかに幼稚園児の問題解決能力と母親の養育態度をみたJones, Rickel, & Smith(1980)[36] の研究や，中国版を作成しアメリカとの比較を行ったLin, & Fu(1990)[37] の研究，児童虐待をおこなっている家庭の親に試みたもの(Trickett, & Susman, 1988[38]) などもある。

なお，CRPRは日本版も作成されている（後述)。

**＊文献リスト3（BlockらのCRPRに関する研究）**

(32) McNally, S., Eisenberg, N., & Harris, J.D. 1991 Consistency and change in maternal child-rearing practices and values: A longitudinal study. *Child Development*, **62**, 190-198.

(33) Block, J.H., Block, J. & Morrison, A. 1981 Parental agreement-disagreement on child-rearing orientations and gender-related personality correlates in Children. *Child Development*, **52**, 965-974.

(34) Roberts, G.,C., Block, J.H., Block, J. 1984 Continuity and change in parents' child-rearing practices. *Child Development*, **55**, 586-597.

(35) Vaughn, B.E., Block, J.H., Block, J. 1988 Parental agreement on child rearing during early childhood and the psychological characteristics of adolescents. *Child Development*, **59**, 1020-1033.

(36) Jones, D.C., Rickel, A.U., & Smith, R.L. 1980 Maternal child-rearing practices and social problem-solving strategies among preschoolers. *Developmental Psychology*, **16**, 241-242.

(37) Lin, C. Y. C., & Fu, V.R. 1990 A comparison of child-rearing practices among Chinese, immigrant Chinese, and Caucasian-American Parents. *Child Development*, **61**, 429-433.

(38) Trickett, P.K., & Susman, E.J. 1988 Parental perceptions of child-rearing practices in physically abusive and nonabusive families. *Developmental Psychology*, **24**, 270-276.

**その他の研究**

次ぎに，その他の親子関係の質問紙に関する研究についてみてゆこう。Roe, & Siegelman(1963)[39] は，Parent-Child Relationship Questionnaire (PCR) という質問紙を作成し学生を対象に実施し因子構造などを調べている。因子分析の結果10の因子を抽出しているが，それらをSchaeferの提起した2次元の中に位置付けようとしている点ではとくに目新しいものはない。さらに，Siegelman(1965)[40]は，Bronfenbrenner Parent Behavior Questionnaireとよばれるものを用い因子分析を行い，Loving，Punishment，Demandingの3因子を出している。Bronfenbrennerの質問紙は子どもが評定するもので45項目15の下位尺度から構成されているようだ。サンプル項目がSiegelman(1965)[40] の論文に載っているが詳細は不明である。同じ質問紙と見られるものはいくつかの研究で用いられてい

る（たとえば，Cox, 1970[41]；Mercer, & Kohn, 1980[42]）。

他の質問紙としてはPaitich, & Langevin(1976)[43]の開発したClarke Parent-Child Relations Questionnaire, Rohner, & Pettengill(1985)[44]が中国，韓国などとの比較研究で用いているParental Acceptance-Rejection Questionnaireなどがあるがいずれも詳細は不明である。

次ぎに紹介するものは英語圏以外で作成されたもので，de Man, Labreche-Gauthier, & Leduc(1993)[45]のものはフランス語，Gerlsma, Arrindell, van der Veen, & Emmelkamp(1991)[46]のものはオランダ語である。ともに思春期の青年を被験者にして評定させるものである。de Manらのものは30項目でautonomy-controlの1次元に関する30項目からなる。Gerlsmaについては，① rejection，② emotional warmth，③ overprotection，④ favouring subjectが報告されている。このうち，④は自分が他の兄弟姉妹くらべてどれほど好かれているかというような主観的な感情を問うものだが，他の3因子はScheaferらのものとかなり似た因子名がつけられている。なお，英訳された質問項目が論文中に掲載されている。

**＊文献リスト3（その他の研究）**

(39) Roe, A., & Siegelman, M. 1963 A Parent-child relations questionnaire. *Child Development*, **34**, 355-369.

(40) Siegelman, M. 1965 Evaluation of Bronfenbrenner's questionnaire for children concerning parental behavior. *Child Development*, **36**, 164-174.

(41) Cox, S., H. 1970 Intrafamily comparison of loving-rejecting child-rearing practices. *Child Development*, **41**, 437-448.

(42) Mercer, G.W., & Kohn, P.M. 1980 Child-rearing factors, authoritarianism, drug use attitudes, and adolescent drug use: A model. *Journal of Genetic Psychology*, **136**, 159-171.

(43) Paitich, D., & Langevin, R. 1976 The Clarke Parent-Child Relations Questionnaire: A clinically useful test for adults. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 428-436.

(44) Rohner, R.P., & Pettengill, S.M. 1985 Perceived parental acceptance-rejection and parental control among Korean adolescents. *Child Development*, **56**, 524-528.

(45) de Man, A.F., Labreche-Gauthier, L., & Leduc, C.,P. 1993 Parent-child relationships and suicidal ideation in French-Canadian Adolescents. *Journal of Genetic Psychology*, **154**, 17-23.

(46) Gerlsma, C., Arrindell, W.A., van der Veen, N., & Emmelkamp, P.M.G. 1991 A parental rearing style questionnaire for use with adolescents: Psychometric evaluation of the EMBU-A. *Personality and Individual Differences*, **12**, 1245-1253.

**親子関係の測定方法に関する近年の議論**

ここ10年あまり，欧米では親子関係を測定する質問紙の開発を目的とした研究は減少している。その理由の1つは発達心理学（とくに乳幼児研究）の方法が多様化し，親子関係の指標も質問紙のみに頼ることが少なくなったことが考えられよう。現在では，親子関係の研究を本格的に行おうとするとむしろ観察法や面接法によるデータに重きが置かれるようになっている。そうした中で，質問紙法のみならず，面接法，観察法をも含めて，親子関係の測定のあり方そのものを問おうとする研究がでてきた。

まず，Holden, & Edwards(1989)[47]は，1899年から1986年までの間に英語圏で発表された親子関係の測定方法を網羅的に調査し検討している。このうち質問紙法は83種のものがあることが報告され，論文中に一覧表のかたちでまとめられている。これらのうち主だったものは本稿で取り上げたものと重なるが，現在，わが国で簡単に入手することが難しいものもかなりふくまれている。Holden & Edwards(1989)はこれらの質問紙を回答様式，下位尺度などの形式的な側面，質問項目の内容（測定しているものは態度なのか，信念なのか，具体的な行動なのかなどといった違い），さらには信頼性，妥当性などのさまざまな視点から検討を加えている。Holden, & Edwards(1989)は展望の結論として，同じような質問紙が繰り返し作成されるだけで完成度の高いものが用いられること

が少ないことを指摘し，さらに項目の表現の問題点，構成概念の曖昧さなどを取り上げ，親子関係の質問紙に対して必ずしも好意的な結論を導いていない。

また，Holdenらは，その10年後には展望をふまえて親子関係の測定で用いられた諸指標のメタ・アナリシスを試みている（Holden & Miller, 1999[48]）。Holden & Miller (1999) は，まず，親子関係が質問紙などで測定されるとき，ふつういくつかの次元が存在することが仮定されその次元に基づく下位尺度で質問紙が構成されていることについて疑問を投げかける。そして，このような測定方法が妥当といえるには，質問紙で測定されている養育態度に関する内容が，① 時間的に一貫したもので年月が経っても変化しない，② 同じ親ならば兄弟姉妹と異なるどの子どもに対しても同じである，③ 異なる場面を通しても変化しない，といった条件が満たされている必要があるとし，上記の3点に関しこれまでに行われた87の研究を用いてメタ・アナリシスを行った。結果は時間的な一貫性，兄弟姉妹間での一貫性に関してはある程度の妥当な結果が得られたようであるが，Holden らは10年前の展望の結論と同様，質問紙法による親子関係の測定に批判的な立場を崩してはいない。

Holden らの主張には納得できる点も多く含まれており親子関係の研究に取り組む者は一応参照すべきであろう。しかし，この主張どおり質問紙法によって親子関係を測定する方法を心理学から完全に破棄しようとしても現実には不可能である。むしろ，Holden らの意見に耳を傾け，質問紙法の限界を踏まえた上で利用することが現実的なやりかたかもしれない。

**＊文献リスト 4 （Holdenらの研究）**

(47) Holden, G.W., & Edwards, L., A. 1989 Parental attitudes toward child rearing: Instruments, issues, and implications. *Psychological Bulletion*, **106**, 29-58.

(48) Holden, G.W., & Miller, P.C. 1999 Enduring and different: A meta-analysis of the similarity in parents' child rearing. *Psychological Bulletin*, **125**, 223-254.

**日本における親子関係の質問紙**

わが国で親子関係の測定法の問題にはじめて本格的に取り組んだのは小嶋秀夫である。小嶋はもともと形容詞対などを用いてＳＤ法による親子関係のイメージ調査などを行っていたが，その後Scheafer(1965a)[25] のCRPBIを翻訳し小学生に実施し親子関係の質問紙の研究に着手した（小嶋，1967[49]，1968[50]）。また，小嶋(1969)[51] では，CRPBIを元に親用の質問紙を作成し，因子構造，親子間の対応などを検討している。用いられた質問紙の全項目は小嶋(1969)[51] の論文の表中に記載されている。

これにつづいて，辻岡美延らを中心とするグループは計量心理学的な視点から主に小嶋が行った一連のCRBPIに関する研究のデータを再分析しながら因子構造の再検討を行った（辻岡・山本 1975a[52]，1975b[53]，1977a[54]，1977b[55]）。また，辻岡らはこれと平行して独自の親子関係の質問紙の作成を試みた（辻岡・山本，1976[56]，1977c[57]，1978[58]）。この検査は子どもが評定するものでEICAと名づけられ発売されていて現在でも入手可能である。なお，検査項目は(56)の論文中で見ることができる。

小嶋や辻岡らの一連の研究は詳細を極めたもので，わが国でこのような研究が行われたことは意義深い。しかし，これらの研究（とくに辻岡らの研究）は発達心理学の研究としてではなく，因子分析の応用的な研究の一環として行われたという事情もあり，計量心理学的な知識の乏しい読者にはやや難解な面もある。

この他わが国で翻訳あるいは作成された親子関係の質問紙としては以下のようなものがある。

まず，BlockのCRPRを翻訳したものに滝沢・依田(1984)[59] の研究がある。これは幼稚園児とその母親を対象として行ったものでCRPRと他の知的発達，社会性などの指標の関連が検討されている。CRPRは全91項目を忠実に翻訳したものが使用されており，論文中の付表で全項目をみることができる。

比較的新しいものとしては新井ら(1993)[60] のものがある。新井らの論文では，まず，これまでに行われた内外の親子関係に関する質問紙の主なものを展望しその問題点が検討されている。その部分は本稿と一部内容が重複するところもあるが，簡潔な記述は参考になる。この展望につづいて新井らは旧来の質問紙の大枠をなしてきた二つの次元に加え，親子関係の認知，ないしは，知識を軸にした次元の必要性を提唱している。そして，それに

従い項目を収集し，父親版，母親版，子ども版の3種類をつくり小学生とその両親に実施している。また，この研究では韓国語版も同時に作成し実施している点は興味深い。データの詳細や日本語版の全項目は論文中に掲載されているので参考になるであろう。

また，親子関係の汎用として利用される質問紙の開発を意図したものではないものの，それぞれの研究のなかで親子関係を測定する必要性から質問項目を作成したものも散見される。田口・徳田(1959)[61]，古川(1974)[62]，森下(1977)[63]，伊藤(1980)[64]，松田・鈴木(1990)[65]，久世・横井・近藤(1990)[66]，西野(1990)[67]，大芦・岡崎・山崎(1996)[68]などがある。これらは研究目的によってさまざまな特徴を見せており，たとえば，伊藤のもの[64]などは対象者をほぼ青年期の女子のみに限定した内容となっている。このうち松田・鈴木の論文以外は質問項目も載せられている。

文献リストの(69)～(72)は，現在，開発が行われている質問紙の中間報告である。項目は掲載されていない。

ところで，これまでの研究が親子関係の中でも主に母子関係のみに注目していたことに対する反省から父子関係に焦点をあてた研究もみられるようになった。尾形・宮下(2000)[73]の研究では「父親の家庭での協力を尋ねる」質問紙，「家事や子育てによる父親の成長発達を測定する」質問紙などが作成されており，親子関係を新たな側面から測定しようとしとものとして興味深い。これらの質問紙は論文中に項目も掲載されているので参考にできる。

**市販の親子関係の質問紙について**

最後になるが，わが国で現在市販され入手が比較的容易な親子関係の質問紙について若干みておきたい。
現在，わが国で市販されている親子関係の質問紙として以下のようなものがある。順不同で示す。

① 田研式　親子関係テスト　品川不二郎・品川孝子　著　田中教育研究所　編　日本文化科学社　1958年
② TK式　診断的新親子関係検査　田中教育研究所　編　田研出版　1960年（頃？）
③ TK式幼児用親子関係検査　品川不二郎・品川孝子　田研出版　1992年
④ EICA親子関係診断検査　辻岡美延　著　日本心理テスト研究所　1978年
⑤ 両親意見診断検査（TK式POT）　品川不二郎・宮本　実・森上史朗　田研出版　1967年
⑥ 教研式　親子関係診断検査（教研式ＦＭＣＩ）　原野広太郎　著　応用教育研究所編　日本図書文化協会　1977年
⑦ 発達研式　親子関係診断検査　詫摩武俊　監修　発達科学研究教育センター　1991年
⑧ ＲＣＲ親子関係検査（診断性RCR）　山下俊郎　監修　親子関係研究会　編著　東京心理　1965年（頃？）
⑨ IB式　MP親子関係診断検査　適性科学研究センター　編集・発行　1978年

①の「田研式　親子関係テスト」は「親用」，「子ども用」の2種類がある。SchaeferやSymondsの2次元に沿った8つの下位尺度とそれに「矛盾」「（両親間の）不一致」を加え10の尺度から構成されている。各下位尺度は10項目である。子ども用の対象年齢も小学校4年生以上高校生までと広く，もっともよく用いられているものだが，現在ではかなり古い。②の「TK式　診断的新親子関係検査」はこれとほぼ同じ内容のもので項目の配列を変更したものとみられる。また，③の「TK式幼児用親子関係検査」は②の「TK式　診断的新親子関係検査」の親用を幼児の親に適した項目に改めたものと思われる。④の「EICA親子関係診断検査」は前述した辻岡ら[56,57,58]によって開発されたもので，わが国で市販されている親子関係の質問紙の中では標準化の過程が完全に明らかになっているのはこれだけであるが，中学生，高校生を対象とした子ども用しか作成されていいない。なお，辻岡らの開発者以外がこのEICAを実際に利用した研究としては森下(1982)[74]，徳田(1987)[75]などの研究がある。⑤の「両親意見診断検査（TK式POT）」はSchaefer, & Bell(1958)[16]のPARIの第4版を翻訳し一部変更を加えたもので「父親用」「母親用」のそれぞれがある。

⑥の「教研式　親子関係診断検査」は，小学校高学年，中学生用で親の子どもに対する態度，子どもの親に対する態度の2つの視点から構成されている。親用は父母に分けず親に対する子どもの漠然としたイメージを問う

という方法は珍しい。⑦の「発達研式　親子関係診断検査」は，比較的新しいもので項目の表現も古さを感じさせない。特徴は検査内容を「学習」「友人関係」「日常生活」の3領域に分けていることである。「父親用」「母親用」，および，小学校5～6年生を対象とした「子ども用」がある。なお，⑥，⑦の両検査とも基本的にはSymondsやScheaferの2次元モデルをもとに構成されている。⑧の「ＲＣＲ親子関係検査」はかなり特異な構成になっている。質問紙は3種類からなり，児童用のA型，母親用のB型，児童用の質問紙と同じだがそれを母親に回答させるC型の3種類からなっており，A型の得点からC型の得点を引いた親子関係の認知のずれが算出できるようになっている。3つの型のいずれもが4つの下位尺度からなるがSymondsやScheaferの2次元とはやや異なる次元を仮定している。⑨「MP親子関係診断検査」は35項目から構成されている親用のみで，「子どもへの接し方」，「子どものようす」，「親としての心の構え」の3つの側面から採点されるようになっている。完全に2次元モデルに準拠している訳ではないが，解釈はその枠組みに沿って行うようになっている。

なお，⑧の「ＲＣＲ親子関係検査」，⑨の「MP親子関係診断検査」は市販はされているものの使用されることは少ない。

**＊文献リスト5（日本における研究）**

(49) 小嶋秀夫　1967　子どもによる親の態度・行動の報告：セマンティック・ディファレンシャル，質問紙と人格要因　金沢大学教育学部紀要，**16**，47-61.

(50) 小嶋秀夫　1968　親子関係検査のバッテリー間因子分析：質問紙とセマンティック・ディファレンシャル　金沢大学教育学部紀要，**17**，29-43.

(51) 小嶋秀夫　1969　親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析　金沢大学教育学部紀要，**18**，55-70.

(52) 辻岡美延・山本吉廣 1975a　斜交軸回転による因子構造の交叉妥当性―親子関係診断テストについての一結果―　関西大学社会学部紀要，**6**(1)，53-66.

(53) 辻岡美延・山本吉廣 1975b　親子関係の四次元―SchaeferのCR-PBIの分析―　関西大学社会学部紀要，**7**(1)，146-160.

(54) 辻岡美延・山本吉廣 1977a　親子関係の相互認知―小嶋氏の原資料の一分析―　教育心理学研究，**25**，18-29.

(55) 辻岡美延・山本吉廣 1977b　父母による親子関係の認知―養育態度・行動の同調性について－関西大学社会学部紀要，**8**(1)，157-170.

(56) 辻岡美延・山本吉廣 1976　親子関係診断検査EICAの作成―因子的真実性の原理による項目分析　関西大学社会学部紀要，**7**(2)，1-14.

(57) 辻岡美延・山本吉廣 1977c　子どもの出生順位による親子関係と人格形成－親子関係診断尺度EICAとYG性格検査を用いて－　関西大学社会学部紀要，**8**(1)，103-120.

(58) 辻岡美延・山本吉廣 1978　親子関係の類型―親子関係診断尺度EICA―　教育心理学研究，**26**，84-93.

(59) 滝沢かおる・依田　明 1984　母親の養育態度と子どもの社会化　横浜国立大学教育紀要，**24**，31-60.

(60) 新井邦二郎・高野清純・庄司一子・丹羽洋子・藤生英行・濱口佳和・尹　熙奉・小林　真・広田信一・谷島弘仁 1993　新しい視点からの親子関係尺度の作成と検討　筑波大学心理学研究，**15**，133-146.

(61) 田口孝之・徳田安俊　1959　家庭の雰囲気についての研究　心理学研究，**30**，243-252.

(62) 古川綾子　1974　両親のリーダーシップ行動認知に関する発達心理学的研究－子どもからみた理想像と現実像の変化について－　教育心理学研究，**22**，1-11.

(63) 森下正康　1977　親に対する子どもの態度スケールの作成とその分析－性格形成における同一視理論の検討のために－　和歌山大学教育学部紀要（教育科学），**26**，53-72.

(64) 伊藤裕子　1980　女子青年の性役割観と父母の養育態度－大学生の職業歴選択を中心に－　教育心理学研究，**28**，67-71.

(65) 松田　惺・鈴木眞雄　1990　子どもの効力感の発達－親の信念体系との関連から－　愛知教育大学研究報告（教育科学編），**39**，73-82.

(66) 久世妙子・横井一之・近藤亜希子　1990　家庭の養育態度が幼児の社会性の発達に及ぼす影響（第2報）－親の養育態度の構造的分析と幼児の社会性－　愛知教育大学研究報告（教育科学編），**39**，193-201.
(67) 西野泰広　1990　幼児の自己制御機能と母親のしつけタイプ　発達心理学研究，**1**，49-58.
(68) 大芦　治・岡崎奈美子・山崎久美子　1996　タイプA行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響　発達心理学研究，**7**，41-51.
(69) 目良秋子・大芦　治・大野祥子・唐澤真弓・竹尾和子・柏木惠子・繁多　進・東　洋　1998　相互認識による親子関係の指標（1）―父母から見た関係性―　日本グループ・ダイナミックス学会　第46回大会発表論文集，140-141.
(70) 竹尾和子・大芦　治・大野祥子・唐澤真弓・目良秋子・柏木惠子・繁多　進・東　洋　1998　相互認識による親子関係の指標（2）―子ども側から見た関係性―　日本グループ・ダイナミックス学会　第46回大会発表論文集，142-143.
(71) 竹尾和子・大芦　治・大野祥子・唐澤真弓・目良秋子・柏木惠子・繁多　進・東　洋　1999　相互認識による親子関係の指標（3）－子どもから見たコミュニケーションと親から見たコミュニケーションの関係性－　日本発達心理学会第10回大会発表論文集，265.
(72) 目良秋子・大芦　治・大野祥子・唐澤真弓・竹尾和子・柏木惠子・繁多　進・東　洋　1999　相互認識による親子関係の指標（4）－子どもに介入しすぎる母親とその子どもの相互認識－　日本発達心理学会第10回大会発表論文集，266.
(73) 尾形和男・宮下一博　2000　父親と家族－夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス，幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達－　千葉大学教育学部研究紀要（教育科学編），**48**，1-14.
(74) 森下正康　1982　中学生における親の養育態度と対人特性の同一視　教育心理学研究，**30**，52-56.
(75) 徳田完二　1987　青年期における自己評価と両親の養育態度　心理学研究，**58**，8-13.

## おわりに

本稿では，親子関係の測定法や質問紙に関して行われた主要な研究論文を収集し，文献目録を作成した。列挙された文献を一瞥して気づくのはかなり古くから多くの研究が行われていたということである。それどころか，近年，親子関係を研究する方法の多様化ともあいまって，質問紙の開発そのものにはあまり積極的な関心が向けられなくなっているようにも見える。だからといって，この領域の研究が過去のもので顧みられる必要のないものと決め付けることは早計である。質問紙で親子関係を測定することは他の方法に比較して容易なこともあり，今後とも親子関係の諸問題が議論されつづける限り，この方法に頼って研究をすすめようとする流れは衰えることはないように思える。

親子関係の質問紙を使って調査，研究を試みるとき，本稿が少しでも役に立つことができればと考えている。